

第六章 薫の物語 中君から異母妹の浮舟の存在を聞く

[第一段 薫、二条院の中君を訪問]

男君も(恋心の薫君も)、しひて思ひわびて(遂に思い詰めて)、*例の(また匂宮の留守の)、しめやかなる夕つ方おはしたり(静かな夕方に二条院に御見えになりました)。*「れいの」という女房言葉は此処に来て頓に多用されている気もするが、本来の<恒例の>や<常習の、いつものように>という語用の他に、読者に何かを気付かせる思わせぶりな言い方としての語用が以前よりも増えていて、そうした場合には敢えてその対象を明示補語して言い換えているが、此処の「例の」も<再び匂宮が留守の時に>という具体意で語られているのだろう。こうした訪問は薫君の常習ではない。

やがて端に御茵さし出でさせたまひて(御方は直ちに縁側に中納言殿の御座布団を女房に差し出させなさって)、「いと悩ましきほどにてなむ(とても体調が優れませんので)、え聞こえさせぬ(お話し申せません)」と、人して聞こえ出だしたまへるを聞くに(と女房をして御挨拶申しなさるのを聞くに)、いみじくつらくて、涙落ちぬべきを(非常に寂しくて涙が落ちそうなのを)、人目につつめば、しひて紛らはして(女房の邪推を恐れて、強いて身繕いに紛らして目頭を押さえ)、「やがて」は<そのまま引き続いて>という接続詞語用もあるようだが、此処では<直ぐに、直ちに間を置かず>と薫君の付け入る隙を封じる語感の副詞語用だ。

「悩ませたまふ折は(御病気の時は)、知らぬ僧なども近く参り寄るを(他人の僧も近くに参り寄るものを、まして後見人の私なら)。医師などの*列にても(医師連中と同じように)、御簾の内にはさぶらふまじくやは(御簾内に仕え申せるのではないでしょうか)。かく人伝てなる御消息なむ、かひなき心地する(このような取次での面談では伺った張り合いがありません)」*「列」は「つら」と読みがある。「つら」は<連なる=連中(の中の一人)>。

とのたまひて、いと*ものしげなる御けしきなるを(と仰って、とても不本意そうな御様子なのを)、一夜*もののけしき見し人びと(先日の親しげな御二人の御様子を知っている女房たちは)、*「物し気」は<不本意そう>。*「物の景色」は<場の雰囲気=親しく楽しげな御二人の御様子>。

「げに、いと見苦しくはべるめり(確かに中納言殿が縁側では、あまりに失礼でございましょう)」

とて(と言って)、母屋の御簾うち下ろして(上げてあった寢室の御簾を全て下ろし揃えてから)、夜居の僧の座に入れたてまつるを(薫中納言を廂の間の、夜居の僧の席にお入れ申し上げるのを)、*女君(匂宮夫人の御方は)、まことに心地もいと苦しけれど(本当に身重で大儀だったが)、人のかく言ふに(女房たちがこのように言うものを)、掲焉にならむも(はっきりと拒否するのも)、またいか(逆に何か特に他意があるのかと疑われるのを避けたい)、とつつましければ(と深慮されたので)、もの憂ながらすこしゐざり出でて(気が進まないながらも少し膝を進めて)、対面したまへり(直答の対面なさいました)。*「をんなぎみ」は<女心>ではなく<夫人>という立場を示している、と取って置く。

いとほのかに(とても小さく)、時々ものたまふ御けはひの(時々何か仰る御方の御様子に)、昔人の悩みそめたまへりしころ(故姉君が病に伏せ始めなされた頃を)、まづ思ひ出でらるるも(先ず思い出されるのも)、ゆゆしく悲しくて(不吉で悲しく)、かきくらす心地したまへば(御先真っ暗の気がなされるので)、とみにものも言はれず(薫君も直ぐには何も言う事が出来ずに)、ためらひてぞ聞こえたまふ(少し経ってから申しなさいませう)。

こよなく奥まりたまへるもいとつらくて(御方が隅に奥まっていられしやるのもとても連れなくて)、簾の下より几帳をすこしおし入れて(薫君が簾の下から身を乗り出して几帳を少し押し入れて)、例の(前回のよう)、なれなれしげに近づき寄りたまふが(馴れ馴れしげに近づき寄って来なされるのが)、いと苦しければ(御方にはとても重圧に感じられたので)、わりなしと思して(困って)、少将といひし人を近く呼び寄せて(少将という女房を近くに呼び寄せて)、

「胸なむ痛き。しばしおさへて(胸が痛いので暫く私の体を押さえてください)」

とのたまふを聞きて(と仰るのを聞いて)、

「*胸はおさへたるは(胸は押さえると)、いと苦しくはべるものを(よけい苦しいのに)」 *
注に<薫の詞。『完訳』は「胸の痛みは、押えたらなお苦しくなる、の意に、恋情を抑えるのは苦しい、の意を言いこめる」と注す。>とある。こういう掛詞は軽口の落語口調だ。此処はそういう薫君の滑稽さを演出しているのだろう。

とうち嘆きて(と呟いて)、み直りたまふほども(廂に座り直しなされる時も)、げにぞ*下やすからぬ(その御方の態とらしい遠ざけ方に中納言は、如何にも内心穏やかなりませぬ)。 *「下(した)」は<内心>だろうが、此処で言う「げにぞ下」の「げにぞ」は薫君の心中に沿った言い方であると同時に、話のマトメも意味していて、この「げにぞ下やすからぬ」は正に落語のオチだ。

「いかなれば(どういうわけで)、かくしも常に悩ましくは思さるらむ(こういつも御加減が悪いのでしょうか)。人に問ひはべりしかば(経験のある女に聞いてみた所)、しばしこそ心地は悪しかなれ(妊娠は初期の暫くは胎盤形成に伴う体質変化で変調を来たすことがあっても)、さてまた(その後はまた)、よろしき折あり(安定するもの)、などこそ教へはべしか(などと言っていました)。あまり若々しくもてなさせたまふなめり(不慣れなあまりに大事を取りすぎていられしやるのでは)」

とのたまふに(と中納言が妊娠を話題になされるので)、いと恥づかしくて(御方はとても極まり悪くて)、

「胸は、いつともなくかくこそははべれ(胸はいつもこんな調子です)。昔の人もさこそはものしたまひしか(亡き姉君もそうであられしやいました)。長かるまじき人のするわざとか(短命の人の特徴とか)、人も言ひはべるめる(医者も言うようです)」

とぞのたまふ(とのおおえなさいませう)。

「げに、*誰も千年の松ならぬ世を(確かに人は誰も千年の松ほどは無い寿命だから)」と思ふには(と思う薫君の心には)、いと心苦しくあはれなれば(姉君の死がとても胸に迫って感じ入ったので)、この召し寄せたる人の聞かむもつつまれず(御方が呼んだ女房が聞いてしまうのも構わずに)、かたはらいたき筋のことをこそ選りとどむれ(不都合な恋情を言い寄るのは思い止まったが)、昔より思ひきこえしさまなどを(以前から姉妹共々気に掛け申していたことなどを)、かの御耳一つには心得させながら(御方にだけは分かるような言い回しで)、人はかたはにも聞くまじきさまに(女房が変に思わないようにして)、さまよくめやすくぞ言ひなしたまふを(上手に無難に言い繕いなさるのを)、「げに、ありがたき御心ばへにも(真に有難い中納言殿の御厚情でいらっしやる)」と*聞きみたりけり(と女房の少将は聞いていました)。 *「たれもちとせのまつならぬよを」は注に<薫の心中の思い。源氏釈「憂くも世に思ふ心になはぬか誰も千歳の松ならなくに」(古今六帖四、うらみ)を指摘。>とある。 *「聞きみたりけり」は敬語遣いが無い。注には<『完訳』は「薫の真意が隠蔽されているので、中の君への厚意をいかにも殊勝なもの、少将は感動的に聞く」と注す。>とある。

[第二段 薫、亡き大君追慕の情を訴える]

「何事につけても、故君の御事をぞ尽きせず*思ひたまへる(何につけても亡くなった姉君の事がいつまでも思い出されるのです)。 *「おもひたまへる」の「たまへ」は口語文での謙譲の助動詞「たまふ」の下二段活用未然形で、「る」は自発・受身の助動詞だから、「思ひ給へる」は<存じられます>という薫君の発言文だ。渋谷校訂では、下の「いはけなかりしほどより」からが薫君の発言文とされているが、私は、この「何事につけても」からが薫君の発言文と読んで置く。この「何事につけても故君の御事」という前振りが、姉君への恋情を吐露する形で御方に言い寄る、という薫君の粉飾手法を示しているのだろう。

いはけなかりしほどより(物心付いた時から)、世の中を思ひ離れてやみぬべき心づかひをのみならひはべしに(権勢を離れて穏やかに一生を終えたいという考えばかりしておりましたが)、さるべきにやはべりけむ(そういう運命だったのでしょうか)、疎きものからおろかならず思ひそめきこえはべりし*ひとふしに(親密ではないのに深く思い込み申した一つの恋情に)、かの本意の聖心は(知り合う元であった仏道心は)、*さすがに違ひやしにけむ(そのままでは背いてしまう事になってしまうかも知れないと、)。 *「ひとふし」は聞き様によっては<姉君への一途な思い>で、少将君にはそう聞こえたのだろうが、御方には<同根の姉妹=自分>に聞こえたのだろう。 *「さすがに違ひやしにけむ」で句点が打たれ文末とする渋谷校訂だが、同意出来ない。この「さすがに」の「さ」は<ひとふし>であり、「す」は<そのまま進行する>で、「が」は<ということ>、「に」は<なのでは>という逆接なので、「たがひやしにけむ」の「や」は反語ではなく疑問で条件項を成すから、例え形式的に此处で文末として余韻の間を置いたとしても、文意は下文に掛かるし、逆に言えば、下文はこの条件項を受けて読まなければ意味が通らない。

慰めばかりに(その恋情を紛らす為に)、ここにもかしこにも行き*かかづらひて(あちらこちらに出かけて女を求め)、人のありさまを見むにつけて(それぞれの事情を知れば)、紛るることもやあらむなど(違う恋情を持つかも知れないと)、思ひ寄る折々はべれど(試した事が度々ありましたが)、さらに他さまにはなびくべくもはべらざりけり(一向に他の女に引かれる事はありませんでした)。 *「かかづらふ」は<関係を持つ>だから、単に知り合うというよりは体の関係になるという言い方だろうし、また当時、身分のある男女が知り合うという事自体が情事を意味したようにも思う。いくら結びで「他さまにはなびくべくもはべらざりけり」と言っても、女に面と向かって、他の女とずいぶん経験したがという言い方に

誠実さはあるのだろうか。俺にはお前が一番だ、くらいの曖昧な言い方なら、そりゃあそれなりに各自いろいろな思いはあるだろうから、一応は正直さが伝わるような気もするが、話が具体的になると、その相手の人生までが見えて来て妙に社会性が意識されて熱が冷める、みたいなことがあるんじゃないのかな。ただ、社会性は意識を深めるかも知れないから、必ずしも熱は冷めないか。相性や愛憎は十人十色で、私は経験が少ないので分からない世界だが、それでも相手人数と誠意とは何処かで反する気がしてならない。

よろづに思ひたまへわびては(気を紛らわそうといろいろ努力してみても)、心の引く方の強からぬわざなりければ(他の人に興味を強く持てなかったのも)、好きがましきやうに思さるらむと(好色者の様にお思いになるかと)、恥づかしけれど(宇治姫には極まり悪いが)、あるまじき心の(狼藉に及ぶ心算が)、かけてもあるべくはこそめざましからめ(少しでもあるなら不届きでしょうが)、ただかばかりのほどにて(ただこのようなことで)、時々思ふことをも聞こえさせ承りなどして(時々世間話を申しお聞きして)、隔てなくのたまひかよはむを(親しくお話しし合うのを)、誰れかはとがめ出づべき(何で非難されなければならないでしょうか)。世の人に似ぬ心のほどは(普通の男とは違う私の自制心は)、皆人にもどかるまじくはべるを(誰にも尊立てられるような不祥事は起こしませんから)、なほうしろやすく思したれ(どうか安心してください)」

など(などと中納言は)、怨み泣きみ聞こえたまふ(姉君の不幸を嘆き泣いてはお話し申しなさいます)。

「うしろめたく思ひきこえば(あなた様を御信頼申さなければ)、かくあやしと人も見思ひぬべきまでは聞こえはべるべくや(このように人が変に思うほど親しくお話し申しましょうか)。年ごろ(年来)、こなたかなたにつけつつ(父宮や姉君の追善供養について)、見知ることどものはべりしかばこそ(手厚く御世話下さっていることを承知していればこそ)、さま異なる頼もし人にて(格別な援助者として)、今はこれよりなどおどろかしきこゆれ(今は私の方から御相談を持ち掛け申しているのです)」

とのたまへば(とお方が仰ると)、

「さやうなる折もおぼえはべらぬものを(特に御世話申した覚えもございませんが)、いとかしこきことに思しおきてのたまはするや(過分にお褒め頂きました)。この御山里出で立ち急ぎに(この度の宇治行きに)、からうして召し使はせたまふべき(何とかお声掛け頂けたようです)。それもげに(それも仰せのように)、御覧じ知る方ありてこそはと(御評価頂いてのことと)、おろかにやは思ひはべる(張り切っております)」

などのたまひて(などと中納言はお応えになって)、なほいどもの恨めしげなれど(まだとても言い足りないようだが)、聞く人あれば(人の耳もあるので)、思ふままにもいかでかは続けたまはむ(思うままにもどうして申し続けなされましよう)。

[第三段 薫、故大君に似た人形を望む]

外の方を(とのかたを、庭の方を)眺め出だしたれば(眺めてみると)、やうやう暗くなりたるに(次第に暗くなって来て)、虫の声ばかり紛れなくて(虫の声ばかりが聞こえて)、山の方小暗く

(やまのかたをぐらく、築山辺りが木々で薄暗く)、何の*あやめも見えぬに(何が如何とも見分けられないほど遅い時分なのに、非常識にも良人の留守に)、いとしめやかなるさまして寄りみたまへるも(中納言がすっかり落ち着き払って長押に寄り掛かっていらっしゃるのにも)、わづらはしとのみ内には思さる(面倒なこととばかり御方には思えなさいます)。 *「あやめ」は「文目」で<織物の糸筋>のことで、その筋目で織り柄を作ることから<物の識別>のことであり、<もの筋道=道理>をいう言い方でもあって、此処でも薫君の<非常識>を難じることに築山の暗闇を掛けた言い回しで洒落ている、のだろう。野暮は承知で、敢えて明示補語する。

「*限りだにある(忘れられるものなら)」 *注に<薫の詞。『源氏積』は「恋しさの限りだにある世なりせば年へてものは思はざらまし」(古今六帖五、年へていふ)を指摘。>とある。「年経て」は死別か離別から何年か過ぎて>だろうから、傍耳には故姉君への慕情のように聞こえるが、今までの前振りを踏まえた上で、「限りだにある(限度さえあるなら)」だけを取り出して訴えれば、御方には<あなたが忘れられない>という口説き文句に聞こえる、という仕掛けなのだろう。

など(などと中納言は)、忍びやかにうち誦じて(低い声で朗誦して)、

「思うたまへわびにてはべり(思いあぐねております)。*音無の里求めまほしきを(どこかにある音の無い里で思いっきり泣きたいものを)、かの山里のわたり(あの宇治の辺りに)、わざと寺などはなくとも(大層な寺ではなくとも)、昔おぼゆる人形をも作り(故姉姫に似せた人形を作り)、絵にも描きとりて(絵にも描いて)、行なひはべらむとなむ(供養のお勤めを行なおうかと)、思うたまへなりにたる(考えるようになりました)」 *「おとなしのさと」は大辞泉の「音無川(おとなしがは)」の項目に<和歌山県田辺市本宮(ほんぐう)町本宮の熊野本宮大社付近を流れ、熊野川に合流する川。この地一帯を音無の里と呼んだところからこの名がある。[歌枕]>とあり、その土地柄を想定した言い方かも知れない。また、「音無の滝」が<京都市左京区大原の来迎(らいごう)院の東にある滝。[歌枕]>とされていて、行幸巻一章一段の大原野行幸にオオハラ繋がり引き合いに出された「とにかくに人目堤を堰きかねて下に流る音無の滝」(源氏積所引、出典未詳)あたりも想定されるのかも知れない。ただ、私にとって印象深い「滝」は若紫巻一章四段の北山の情景で、いや、決して北山に「音無の滝」という名称は登場していないが、何故か「音無」を思わせる描写だった。などと言出したのも、「おとなし」を地名に付ける意図は相当に分かり難く、特定の謂れか特別な経緯が下敷きに無いと成立し難く思われ、歌枕として取るなら具体的な地名としてではなく、都を離れた里の想念として<(雑念=音)が無い神聖な険しさ>とか<大人しい穏やかさ>を言い表す言葉と受け止めるべきもののような気がする。で、注には<『源氏積』は「恋ひわびぬねをだに泣かむ声立てていづれなるらむ音無の里」(拾遺集恋二、七四九、読人しらず)を指摘。>とあり、大声で泣いても聞こえない音の無い(=誰も聞く者が居ない)田舎、みたいな言葉遊びに近い語用にさえ見える。

とのたまへば(と仰ると)、

「あはれなる御願ひに(有難い御供養ですが)、また*うたて御手洗川近き心地する人形こそ(一方ではふと、在原なりける男が御手洗川に褌で流した人形に似た気がして)、思ひやりいとほしくはべれ(考えてみると懸念もされます)。*黄金求むる絵師もこそなど(また肖像画についても、報酬次第で描き分ける絵師だったら真実が伝わらないと)、うしろめたくぞはべるや(心配されます)」 *「うたてみたらしがはちかきこちするひとがた」は注に<中君は『伊勢物語』の褌のために人形を川に

流した話を例にとって反駁する。『異本紫明抄』は「恋せじと御手洗川にせし禊神はうけずもなりにけるかな」（古今集恋一、五〇一、読人しらず）を指摘。>とある。古今集の歌は『伊勢物語』では65段に採用されているらしい。

『伊勢物語 65 段』は皇后の従姉妹に当たる清和天皇の召人と殿上童だった在原業平が情交して、「在原なりける男のまだいと若かりける」が無分別にも人目憚らず女に逢いに来て、事が露見し男は流罪となり女は蔵に幽閉された、という話で、当時の近似事件と宮廷での噂話のありさまが偲ばれるような逸話だ。神職を務める前に斎王代が身を清めるために紙の人形を御手洗川に流す禊は今の観光行事でも模倣されているようだが、『伊勢物語 65 段』では「陰陽師を呼びてく恋せじ」という祓への具してなん行きける」と在原なりける男が絶縁を試みるという設定になっていて、御方の言う「ひとがた」はその「く恋せじ」という祓への具を指すらしい。で、在原なりける男は絶縁を試みるものの、「祓へけるままにいと悲しきの数まさりて在りしより異に恋しくのみ覚えければ」「神は受けずも成りにけるかな」と、思いは断ち切れなかったわけで、「思ひやりいとほし」は故姉君が禊で人形流しされてしまうことが可哀相>だという言い方に被せて、いつまでも諦めずに言い寄ってくる中納言の思い切れない思いがく鬱陶しい>と訴えてもいるのだろう。 *「こがねもとむるゑし」は注にく『源氏積』は王昭君の故事を指摘。>とある。王昭君の故事は匈奴に嫁がされた悲劇の漢族女性の話との事で、その嫁選びに際して似顔絵を参照したらしく、賄賂で手心を加えた絵師が運命を左右する役割を持って登場することを指しているようだ。ざっと、報酬で手加減する絵師の邪心、という言い方を御方はしているのだろうが、絵は構想をいう言い方でもあって、真意はやはり王昭君に自分を準えて、あなたの計略で私は匂宮に嫁いだのではないか、という嫌味なのだろう。ただ、こうしたことを理詰めで追求する、というわけではなくて、是等の言い回しで薫君を牽制している御方の防御せざるを得ない立場と情況の微妙さ、を読者に示す工夫された演出のように見える。

とのたまへば(と御方がお応えなさると)、

「*そよ(そのことですよ)。その*工も絵師も(その工作師も絵師も)、いかでか心には叶ふべきわざならむ(どうして満足な作品が作れましょう)。*近き世に花降らせたる工もはべりけるを(最近に花盛りを実現した画策もあったのですから)、*さやうならむ変化の人もがな(それに応じてそういう凄みのある変身を見せる人が望まれます)」 *「そよ」は相手の提示した話題を引き継ぐことを示す同意の相槌だが、その同意の程度はさまざまだ。同じ話題に同調すると言っても、先行者とは全く方向性の違う話に進むということは日常的に多く見られるところだ。が、此处では薫君は御方の真意をしっかりと受け止めているのだろう。即ち、現況は全てあなたのお膳立てによるものではないか、という御方の指摘に同意を示している。その上で、その御方の表現を逆手に取って、更に言い寄るという趣向がこの発言だ。 *「工(たくみ)」はく人形を作る彫刻師>らしいが、御方と薫君との隠語符牒ではく匂宮を妹君の寝所に招き入れた仕掛け工作>を意味する。「絵師」はく構想=薫君と姉君、匂宮と妹君、という取り合わせで愉しく暮らす>という暗意。姉君の死去でその構想は破綻した、というのが薫君の主張。 *「近き世に花降らせたる工もはべりけるを」はく近年見事な釈迦の蓮華座像を彫って寺に奉納した名工も居たが>という言い方らしく、実際に有名な大仏造営でも近年にあったのかもしれないが、注にはく出典未詳の故事。>とある。が、暗意は、匂宮と源氏六姫の結婚を示しているのだろう。 *「さやうならむ」はくそのような>という言い方でもあるが、そうした情況に相応しいく臨機応変な>とも読める。「変化の人(へんげのひと)」は霊力が乗り移ったく神がかった人=神業の名工>でもありく柔軟に変化できる人>でもある。御方の変身を促しているのだろう。

と(と中納言が)、とざまかうざまに忘れむ方なきよしを(あれこれと故姉君を忘れられないことで御方への恋情も諦められないという話の向きを)、嘆きたまふけしきの(訴えなさる姿の)、心深げなるもいとほしくて(情け深そうなのもいたわしく)、今すこし近く*すべり寄りて(もう少

し御簾に近く素早く寄った姿勢で)、*「滑り寄る」は大辞泉に< [動ラ四] すべるようにして、そっと近寄る。にじりよる。>とある。また古語辞典には、「滑り出づ」「すべり入る」「すべり失す」がそれぞれ<そっと出る><音も無くすうっと中に入る><音も無く居なくなる>とあり、「すべる」は<静かに動く>よりは<早く動く>語感だ。だから、御方は<そっと>ではなく<すっと>近付いた、と読んで置きたい。ただ、御方はわざわざ少将君を呼んでいるのだから、背中をさすって貰うなり、体を支えて貰うなり、とにかく少将君に体を半ば預けた格好で居た筈だ。其処から「すっと動く」には、少将を手で制するなり、一言掛けるなりして、体を御簾側に傾けて、手を畳に付いて少しだけ前に進むのだろう。身重の体で素早く動けるのはその程度だ。となると、態勢は前かがみになっているに違いない。

「人形のついでに(人形ということに付いては)、いとあやしく思ひ寄るまじきことをこそ(とても不思議な意外なことを)、思ひ出ではべれ(思い出しました)」

とのたまふけはひの(と仰る御方の感じが)、すこしなつかしきも(少し親しげなもの)、いとうれしくあはれにて(薫君にはとても嬉しく感激して)、

「何ごとにか(それはどういうことですか)」

と言ふままに(と言いながら)、几帳の下より手を捉ふれば(几帳の下から御方の手を掴むので)、いとうるさく思ひならるれど(御方はとても始末に困ったが)、「いかさまにして(何とか)、かかる心をやめて(こうした中納言の逸る気持を宥めて)、なだらかにあらむ(事無きを得たい)」と思へば(と思うので)、この近き人の思はむことのあいなくて(近くにいる少将君が変に思うのが不都合なので)、さりげなくもてなしたまへり(何事も無い様な振りをしていらっしやいました)。

[第四段 中君、異母妹の浮舟を語る]

「年ごろは(年来)、世にやあらむとも知らざりつる人の(この世に居るとも知らなかった人が)、この夏ごろ、*遠き所よりものして尋ね出でたりしを(今年の夏に疎遠な筋を頼って私を探し出して此処へ便りを遣してきたのですが)、*疎くは思ふまじけれど(縁故者なので赤の他人と余所余所しくは思えないが)、またうちつけに(かと言って急に)、さしも何かは睦び思はむ(さすがにどうして親しく思えようか)、と思ひはべりしを(と思っていました)、*さいつころ来たりしこそ(先日に訪ねて来た時に)、あやしきまで、*昔人の御けはひにかよひたりしかば(不思議なほど故姉君の御姿に似通っていたので)、あはれにおぼえなりにしか(感心しました)。*「とほきところ」は<遠方の地方>ではないだろう。父宮は王族なので臣籍降下しない限りは地方暮らしはしないし、出来なかったはずだ。この「遠し」は<縁遠い=疎遠な関係>で、「所」は<部分=部分的なつながり=わずかな手掛かり=筋>みたいな言い方だろう。*「うとくはおもふまじけれど」は注に<疎遠にはできない人。婉曲な言い回し。異母姉妹であることをほのめかす。>とある。此処で異母姉妹とまでは読み切れないが、縁故者だとは補語できるだろう。*「さいつころ」は「先頃」で<先日>。*「むかしびと」が<故姉君>のことなのは何度も語用されて来ているが、「あやしきまで」「御けはひにかよひたりし」縁故者の登場は薫君のみならず読者にとっても非常に刺激的だ。

形見など(私を故姉君の形見だと)、*かう思しのたまふめるは(こうもあなたが思い仰っているようなのは)、なかなか何事も、あさましくもて離れたりとなむ(むしろ私は姉とは何につけてもまるで違っているとのように)、見る人びとも言ひはべりしを(私たち姉妹を知っている女房たち

も言っておりますが)、いとさしもあるまじき人の(そんなに似るはずのない異腹姉妹のその縁故者が)、いかでかは、さはありけむ(どうして、あんなに似るものでしょうか)」 *「かう思しのたまふめる」は注に<主語はあなた薫。薫が私を故大君の形見だと、の意。>とある。

とのたまふを(と御方が仰るのを)、夢語りか(薫君は夢物語か)、とまで聞く(と信じられない思いで聞きます)。

「さるべきゆゑあればこそは(それだけ強い血縁だから)、さやうにも*睦びきこえらるらめ(そのようにその縁者はあなたを慕い申しなさるのでしょう)。などか今まで、かくもかすめさせたまはざらむ(どうして今まで、こうも全くお知らせ下さらなかったのですか)」 *「睦びきこえらるらむ」の主語はその縁故者。「聞こゆ」は縁故者の御方に対する謙譲。「らる」は中納言の縁故者に対する間接表現の尊敬語。「らむ」は話者である中納言の推量。

とのたまへば(と中納言が仰ると)、

「いさや、そのゆゑも(いえその縁故関係も)、いかなりけむこととも思ひ分かれはべらず(どういう経緯か分からないのです)。*ものはかなきありさまどもにて(私たち姉妹が頼りない身の上で)、世に落ちとまりさすらへむとすらむこと(後に残されて世に流離うだろうこと)、とのみ、*うしろめたげに思したりしことどもを(とばかりを、心配そうにお考えだった亡き父宮の御無念を)、ただ一人かき集めて思ひ知られはべるに(一身に私が負って成仏を妨げたかと辛い立場を思い知らされておりますところに)、*またあいなきことをさへうち添へて(また不都合な事情まで加わって)、人も聞き伝へむこそ(人の噂に立つのも)、いといとほしかるべけれ(とても懸念される所です)」 *「ものはかなきありさまどもにて」は注に<接尾語「ども」、大君と中君をさす。卑下。父八宮が遺される姉妹を心配していたこと。>とある。此処はその縁者の縁故を語るべき場面だろうに、自分たちのことを語るという分かり難さだが、どうやら故宮は宇治姉妹の将来を案じていた以外は、別腹の姫のことは何も話していないままに亡くなった、という事情を中納言に聞かせているらしい。だから、此処で御方が言っているのは自分たちの事ではなくて、故宮の様子を説明しているのだろう。が、実に分かり難い。が、こうした言い方は、説明や弁明では、実際には良くあるような気もする。つまり、実態を話して、真意は聞き手に判断させる、という姿勢で、意外に正しい方法かも知れない。 *「うしろめたげに思したりしことども」は故宮の現世への執着心であり、それが為故宮の成仏が妨げられたと山寺の阿闍梨が姫たちに告げていた(総角巻六章七段)。 *「またあいなきこと」は故宮または故宮の成仏にとって不都合なこと、らしい。

とのたまふけしき見るに(と仰る御方の様子からして)、「宮の忍びてものなどのたまひけむ人の(八宮が密かに言い寄りなさった女が)、*忍草摘みおきたりけるなるべし(故宮を偲ぶ種を仕込んで置いたようだ)」と見知りぬ(と薫君は分かったのです)。 *「しのびぐさつみおきたりける」の言い回しは注に<『奥入』は「結びおきし形見の子だになかりせば何に忍ぶの草を摘ままし」(後撰集雑二、一一八七、兼忠朝臣の母の乳母)を指摘。>とある。「何に忍ぶの草を摘ままし」は<何を以てシノブグサを摘む甲斐があるだろう>という言い方に<どうして亡き人を偲ぶ事が何度も出来るだろう>という思いを洒落ている。即ち、「しのびぐさ」は「偲び種」との掛詞で、「つむ」も「摘む(摘み取る)」と「積む(重ねる、繰返す)」の掛詞だから、「忍草摘みおきたりける」は<シノブグサを摘み置いてある>という言い方に<故人を偲ぶ種を仕込んでいた>と洒落ているわけだ。

似たりとのたまふゆかりに耳とまりて(故姉君に似ていると御方が仰ったその縁故者が薫君は気になって)、

「かばかりにては(是だけの話では良く分かりません)。同じくは言ひ果てさせたまうてよ(どうせなら全部話してください)」

と、いぶかしがりたまへど(と聞きたがりなさったが)、さすがにかたはらいたくて(そうは言っても妾の子のことは極まり悪い話なので)、えこまかにも聞こえたまはず(御方はとても詳しくはお話し申しなされません)。

「尋ねむと思す心あらば(お知りになりたいなら)、そのわたりとは聞こえつべけれど(大体のところはお教えできますが)、詳しくしもえ知らずや(詳しいことまでは知りません)。また、あまり言はば(またあまりお話し申して)、*心劣りもしぬべきことになむ(思い違いがあってもいけませんから)」 *「こころおとり」は<予想値よりも結果が悪くなること>らしい。「しぬべき」は<しかねない>で、敬語遣いが無いので、主語は御方自身だ。となると、此处でいう予想値は御方の期待であり、御方がこの縁故者のことを薫君に話す事で何を期すのかと言えば、此处までの御方の発言からして、薫君の故姉君つながりの関心が御方からその縁故者の方に移って気楽になることなのだろう。で、その期待に反することとは、薫君を無闇に刺激扇動して、今以上に自分への歎心を買ってしまい、薫君の恋情を断わり切れなくなって不倫関係になる事態、それも子持ちの身でということだ。こういう自作自演は<期待外れ>とは言わずに<思惑違い>だが、それもあくまで内心での<計算違い>という思いで、相手に話すなら単に<思い違い>という言い方になるだろう。

とのたまへば(と御方が仰ると)、

「*世を、海中にも、魂のありか尋ねには(「長恨歌」にある道士が冥界を海の孤島の仙人の山まで訪ねるといふ、亡き愛人の靈魂探しには)、心の限り進みぬべきを(何処までも突き進んで行ける私なのだから)、いとさまで思ふべきにはあらざなれど(何も其を故姉君の靈魂とまで考えられるわけではないが)、いとかく慰めむ方なきよりはと(とても今のような慰めようのないままよりは増しだろうと)、思ひ寄りはべる人形の願ひばかりには(考え付いた人形を祭るといふこととして)、などかは(どうしてその縁故者を)、*山里の本尊にも思ひはべらざらむ(山里の本尊のように大事に思わずに居られましようか)。なほ、確かにのたまはせよ(もっと詳しくお話し下さい)」 *「よをうみなかにもたまのありかたづね」は注に<以下「確かにのたまはせよ」まで、薫の詞。『白氏文集』「長恨歌」の故事を踏まえた物言い。>とある。「ちゃうごんか」はこの物語で何度も引かれている。七言古詩の対句 60 行 120 句、ということだが、七言と 120 句は数えれば分かるが、古詩の韻形式や趣向意味に付いての素養は私には無い。ただ、ウィキペディアに掲載されている訳文を通読して、その文言の意味内容の簡潔さと能弁さを知り、それらが心地良い韻律で書かれていることを思えば、如何にも世に語り継がれるべき名調子らしい気もした。唐代の優れた英雄である玄宗皇帝と傾国美女の楊貴妃との波乱物語ということで人間世相の真実の一面を切り取ったものではありそうだ。さて、此处に引かれた部分だが、楊貴妃を失って悲しみに暮れる皇帝が道士に冥界の楊貴妃の靈を探させて気持を通わせたいと願う後半の 83、4 句であり、「世を」は<冥界を>、「海中にも」は水中ではなく<海の孤島の仙人の山>で、その「魂のありか尋ね」でその山の仙女の一人に漸く楊貴妃の靈魂を探し出した、という人生の価値観の尊さを暗示するような場面だ。しかし、この「長恨歌」は現代人の一般常識ではないので、当然私にも

当文は不幸にもかなりの難文だ。*「やまざとのほんぞんにもおもふ」はく故姉君に代わる者として妻に迎える>という意味だろうが、此処はこのままの言い方でその意味を受け止めないと語りの味わいを損なう。

と、うちつけに責めきこえたまふ(と中納言はしきりに問い詰めなさいます)。

「いさや(いやさて)、*いにしへの御ゆるしもなかりしことを(故宮の御認めも無かった嫡外子のことを)、かくまで漏らしきこゆるも(此処まで洩らし聞かせ申すのも)、いと口軽けれど(とても口の軽いことだが)、変化の工求めたまふいとほしさにこそ(化身の工作師まで求めなさるあなたの故姉君への執心に同情されて)、かくも(申したままで)」とて(と御方は言って)、*「いにしへ(往にし方)」は注に<故父宮をさす>とある。

「いと遠き所に年ごろ経にけるを(その人は全く疎遠に音信無しに何年も暮らしていたのですが)、母なる人の*うれはしきことに思ひて(私が二条院に迎えられた事で、母なる人がその人を不憫に思って)、あながちに尋ね寄りしを(わずかな縁者を通して連絡をして来たのですが)、はしたなくもえいらへではべりしに(無下にお断りも出来ないのも)、ものしたりしなり(お会い申しました)。ほのかなりしかばにや(ちょっと見の限りでは)、何事も思ひしほどよりは見苦しからずなむ見えし(身なりや物腰は困窮生活と思っていたほどよりは卑しからず見えました)。これをいかさまにもてなさむ(この娘を何とか上流世界に交じらせたい)、と嘆くめりしに(とその母御は嘆願申していたようですが)、*仏にならむは(あなた様の山里の本尊になろうというのは)、いとこよなきことにこそはあらめ(もうこの上ない幸いでしょうが)、*さまではいかでかは(其処までの人かどうかは)」 *「うれはし」は<嘆かわしい>。「うれはしきことに思ひて」の対象は<娘の境遇>だから、「母なる人」は今の暮らしを<嘆かわしく思っていること>という文意だが、では何故今までは音信不通だったのか。それは八宮が政治闘争に敗れて、都を追われて宇治に隠遁生活をしていたために、関わって迫害されるのを恐れていたからだろう。ところが此処に来て、宇治姫が今をときめく匂宮から二条院に迎え入れられたと聞き及んで、その慈悲に与ろうと思ふ母心でお方を訪ねた、というわけだ。その事情も少しは補語したい。*「ほとけにならむ」は注に<『完訳』は「薫の「山里の本尊」を受けた言い方。薫の思われ人になるのは先方として願ってもない幸いだろうが、それに値するほどでもない意」と注す。>とある。洒落た言い方のようにだし、こういう言い方をする御方に、地位を得た者の余裕が示されているのかも知れないが、素養の無い私には面食らうほどの難文だ。*「さまではいかでかは」は客の気を引く女郎屋の女将、いや高級クラブのママみたいな口ぶりだ。御方が此処まで言うとは、宇治の妹姫もずいぶん大人になった。

など聞こえたまふ(などとお応え申します)。

[第五段 薫、なお中君を恋慕す]

「*さりげなくて(こんな挑発で他の女を勧めて来るとは、御方はつれなくも)、かくうるさき心をいかで言ひ放つわざもがな(私の煩わしい言い寄りを何とか言い逃れることはできないか)、と*思ひたまへる(とお思いになって持ち出した縁故者の話だ)」と見るはつらけれど(と思うのは辛かったが)、さすがに*あはれなり(そんな御方に薫君は愛着を覚えます)。*「さりげなくて」は、直上の「さまではいかでかは」という玄人めいた口振りに御方の引いた立場の冷静さを感じて、それに反発した薫君の発言という語りの呼吸だ。が、その突き放したような御方の物の言い方だけで薫君が怯むとも思えない。物の言

いは確かにその場の空気を変えるが、それだけにその場に应じた煽りや宥めの演出でもあるわけで、その演出の核心はその話題との兼ね合いだ。此処にある御方の「言ひ放つわざ」とは、御方が<他の女を勧めて来た>という話の内容に対しての薫君の認識だろう。*「おもひたまへる」の主語は御方。「たまへ」は動作主対の御方に対する敬語「たまふ」の連用形。「る」は事象認識の助動詞「り」の連体形で下にくものなり>くらいが省かれている。その「もの」とは<御方が持ち出した縁故者の話>だろう。*「あはれなり」の対象は<話題>か<御方>か。与謝野訳文では<話題>としてあり、渋谷訳文では<御方>らしい。この文だけでは分かり難いが、下文に続く文脈からすると<御方>と取った方が意味が通る。また、この対象が分かり難いのは「さすがに」という曖昧な副詞の所為でもある。「さすがに」は形容対象がはっきりしてこそ意味が定まるという代名詞と間接表現のかたまりで、「あはれ」と同類の感嘆詞に近い語感で、話者の感想なら否定も出来ず、上手くすれば共感も得られるので、作者には失敗の無い便利な言葉だが、それだけに読者にはいつも分かり難い。

「あるまじきこととは深く思ひたまへるものから(私の気持を受け入れるのは不倫だとは深く思っいらっしやるものの)、頭証にはしたなきさまには(頭ら様に恥を搔かせる形には)、えもてなしたまはぬも(決してあしらいなさないのは)、見知りたまへるにこそは(私の姉君への執心を良く分かっていらっしやる事情からだ)」と思ふ心ときめきに(と御方と心が通うように思う嬉しさのままに)、夜もいたく更けゆくを(夜もだいぶ更けて行くと)、内には人目いとかたはらいたくおぼえたまひて(御簾内の御方は人目にひどく不都合に思えなさって)、うちたゆめて*入りたまひぬれば(薫君が惚けている内に奥へ入ってしまいなされたので)、*「入りたまふ」は<奥の間へ引き下がりなさる>ということらしい。「入る(いる)」だけで<中に隠れる>を意味するにしても、「うちたゆめて」が前置される事で表現の具体性は増すのだろう。が、私には直感できない。

男君(薫君は男心に)、ことわりとは返す返す思へど(仕方が無いとは返す返す思うが)、なほいと恨めしく口惜しきに(やはり御方のつれなさが憎らしく残念で)、思ひ静めむ方もなき心地して(冷静になれない気分で)、涙のこぼるるも人悪ろければ(涙を流すのも人目に見つともないので)、よろづに思ひ乱るれど(どうしたものかと思ひ悩むが)、ひたぶるにあさはかならむもてなしはた(一時の感情に任せた乱暴なふるまいをするというのもまた)、なほいとうたて(やはり実に野蛮で)、わがためもあいなかるべければ(自分自身も貶めるものなので)、念じ返して(我慢し直して)、常よりも嘆きがちにて出でたまひぬ(いつも以上に気落ちしてお帰りなさいます)。

「かくのみ思ひては(こんな風に御方にばかり執心しては)、いかがすべからむ(良くなさそうだな)。苦しくもあるべきかな(立場が悪くなるのは目に見えている)。いかにしてかは(どうしたら)、おほかたの世にはもどきあるまじきさまにて(誰にも非難されずに)、さすがに思ふ心の叶ふわざをすべからむ(この満たされない思いを叶えることができるだろう)」

など(などと薫君は)、*おりたちて練じたる心ならねばにや(多くの恋愛経験を積んで鍛えられた処世方に乏しい所為か)、わがため人のためも(自分にとっても御方にとっても)、心やすかるまじきことを(不都合な不倫の道を)、*わりなく思し明かすに(困ったことに思い詰めて夜を明かしなさは)、*「おりたつ」は「降り立つ」で<降りる、下りる>でもあるが、下りて立って<実地する=現場で経験する=経験を積む>ことでもあるらしい。*「わりなく」は<非常に、無理に>と古語辞典にあるが、此処では「練じたる心ならねばにや」を受けるので<困ったことに>という副詞語用かと思う。

「似たりとのたまひつる人も(御方が似ていると仰った異腹妹も)、いかでかは真かとは見るべき(どれくらい本当に似ているのだろう)。*さばかりの際なれば(故宮がお認めなさらなかったほどの低い身分の女なのだから)、*思ひ寄らむに(求婚することに)、難くはあらずとも(障害はないだろうが)、*人の本意にもあらずは(結婚した後で、その人が私の願いどおりでなかったら)、うるさくこそあるべけれ(煩わしい事情を抱え込みそうだ)」など、*なほそなたさまには心も立たず(などと、まだ見ぬ者への夢想よりも親しく見知る御方への思いが募るばかりで、やはりどうも其方の話には気乗りしません)。*「さばかりの際」は注に<『完訳』は「劣り腹で父宮に認められなかったほどだから、身分が低い。容易に手に入れられるとも思う」と注す。>とある。「なれば」の已然形は、「なり」が確定認識の助動詞なので、仮定の未然形(もし~ならば)とは違って<なのだから>という断定となり、薫君の選民意識が強く示されている。*「おもひよる」は<言い寄る>でもあるだろうが、此处では家格を意識しての話題なので実際に<結婚を申し込む>ことを言っているのだろう。当時は、身分は低いとはいえ、それなりの家格の令嬢であれば、女房でもない限り、情事の場までは顔も姿形も直に見られない。薫君はその女が故姉君に似ているかどうかを早く確かめたいのだから、手紙や歌の情緒も大事は大事だが、手っ取り早く顔が見たいのであり、此处での薫君の思考は、故姉君と交わした恋の遣り取りを再現したいのではなく、故姉君の面影を求める自分の未練を慰めたいのだ、と読んで置く事がこの文を解く鍵かと思う。*「ひとのほい」の「人」は、「思ひ寄らむに」と話題の対象に上げられた異腹妹だろう。「の」の格助詞は、「人」という体言が話題となっている文意からして、主語格(は)や所有格(の)ではなく目的格(が)を示す。「本意」は薫君の<願い=期待値>。「あらず」は未来予測の言い方で<結婚して思惑と違っていたら>という言い方。*「なほ」は<尚も御方への思慕が止まず>と補語する。